

研究テーマ	自ら生み出した主題を具体化するための表現活動の工夫 —第2学年「抽象彫刻 ころをかたち」の実践を通して
-------	--

水戸市立第一中学校 教諭 春田 友則

I 研究テーマについて

中学校学習指導要領美術編に、美術科における表現活動の一つとして、「絵や彫刻などのように、対象を見つめ感じ取ったことや考えたこと、心の世界などから主題を生み出し、それらを基に表現の構想を練り、意図に応じて材料や用具、表現方法などを自由に工夫して表現する活動」を挙げている。これを受け、本研究では、心の世界などから主題を生み出し、それを表現する活動として、自分の心の中を探って言葉を見つけ、それを立体的な形として「抽象的に表現する」授業を構想した。

本授業では、自ら生み出した主題を作品としてより具体化させた実感を得ることができるようにするため、平面ではなく実際に触れて感じられる立体で表現することとした。また、具体化した形を、立体として視覚的により感じるができるように、白一色で統一された石膏素材を用いることとした。さらに、石膏素材を彫刻する活動を通して、自分の表現意図に応じた用具の適切な選択や使用法を習得させたいと考え、本テーマを設定した。

II 研究の実際

1 題材名 抽象彫刻「ころをかたち」

2 題材の目標

- 技法や表現を創意工夫し、意欲をもって制作に取り組もうとする。 (関心・意欲・態度)
- 自身の心の中を探ってテーマを見付け、それを基に想像力を働かせながら心豊かな表現の構想を練ることができる。 (発想や構想の能力)
- 材料や用具の特性を生かし、自分の表現意図に合う方法を工夫しながら創造的に表現している。 (創造的な技能)
- 美術における「抽象」の概念を理解し、抽象的に表現された作品のよさを味わうことができる。 (鑑賞の能力)

3 題材について

(1) 生徒の実態

本校の第2学年は、第1学年時の美術科の授業において、自然物や人工物の形をスケッチし、その形を単純化して構成し、着色するといった平面構成の制作は経験があるが、抽象的な形を立体的に表現する制作を行った経験はない。また、自然物などの「実物の形」を抽象化する制作は行ったが、「心の中の言葉」を自由な形として抽象化する制作は経験がない。また、中学校第2学年という発達段階は、写実的な作品を優れたものと認識し、抽象的な作品を「よくわからない」として敬遠してしまう年齢であるといえる。

(2) 題材観

表現に使用する素材は石膏であり、表現技法はカービング(彫刻)である。石膏は、焼石膏の粉末を水と混ぜ合わせることによって短時間で硬化し、硬化後の加工も容易なことから、古来より美術作品や建築物等に使用されてきた身近な素材である。また、カービングという技法は、石膏という素材を自分の意図した形に加工するのに適した技法であるといえる。

(3) 指導観

本題材を学習するにあたり、美術館に収蔵されている立体的な美術作品を鑑賞する活動を通して、「よくわからない」抽象的な形にも様々な意味が込められていることを理解させたい。そして、作品のテーマとなる言葉を紡ぎ出す手法としてブレインストーミングを用い、自分自身の心の中を探りやすくする。さらに、カービングに使用する用具の正しい使用法や、表現に応じた用具の選択方法を学習することを通して、自分の思い描いた形を立体として「抽象的」に表現する喜びを味わわせたいと考える。

また、本題材の制作で使用する小刀は小学校第3学年、彫刻刀は小学校第4学年から図画工作の授業でそれぞれ使用することから、それらの用具を立体制作においても適切に使用できるよう指導していきたい。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
技法や表現を創意工夫し、意欲をもって制作に取り組もうとする。	自身の心の中を探ってテーマを見付け、それを基に想像力を働かせながら心豊かな表現の構想を練ることができる。	材料や用具の特性を生かし、自分の表現意図に合う方法を工夫しながら創造的に表現することができる。	美術における「抽象」の概念を理解し、抽象的に表現された作品のよさを味わうことができる。

5 指導と評価の計画(13時間扱い)

次	時	学 習 内 容	評 価 規 準
1	1	○ 今後の活動内容について確認する。	○ 題材について理解し、制作活動への意欲を高めようとしている。(関心・意欲・態度)
	2	○ 美術における「具象」と「抽象」について学習する。	○ 美術における具象と抽象の表現について理解している。(鑑賞の能力)
2	1	○ 作品のテーマを決定し、アイデアスケッチをする。	○ 自分の心の中の言葉をテーマとし、それを抽象的な形として心豊かに表す構想を練っている。(発想や構想の能力)
	2	○ 石膏を使用し、彫刻のための素材作りをする。	○ 石膏の特性を理解しながら、適切に素材作りを行っている。(創造的な技能)
	3	○ アイデアスケッチを基に、様々な用具を使用しながら石膏の彫刻素材をカービングする。	○ 自身のテーマやアイデアスケッチを基に、心豊かな表現の構想を練りながら制作している。(発想や構想の能力)
9 10	9	○ 細部や表面をやすりがけし、形の仕上げを行う。	○ 材料や用具の特性を生かしながら、自分の表現意図に合う方法で表現している。(創造的な技能)
	10		
3	1	○ 作品の鑑賞会を行う。	○ 友達の作品を主体的に鑑賞し、表現のよさを味わうことができる。(鑑賞の能力)

6 指導の実際

(1) 美術における「具象」と「抽象」についての学習

抽象彫刻を制作するにあたり、美術における「具象」と「抽象」の相違について、彫刻作品のスライドを鑑賞する学習を行った。鑑賞作品は、具象的に制作されているものと、抽象的に制作されているものをそれぞれ投影し、「見て、何がつくってあるかわかる作品」と、「ぱっと見ただけでは何がつくってあるかわからない作品」の2つに分類するといったクイズ形式のワークシートを用いて、具象と



佐藤忠良「群馬の人」 茨城県近代美術館蔵



飯田善国「HITO」 茨城県近代美術館蔵

抽象の概念について理解できるようにした。また、鑑賞用のスライドに使用した作品は全て茨城県近代美術館所蔵の彫刻作品を採用し、授業で学習した作品を、身近にある美術館に足を運べば実際に鑑賞できる機会を与えられるようにした。

(2) 抽象的な形についてのエクササイズ

美術における「抽象」という概念を理解した上で、ワークシートを用いて、様々な「ことば」から受けるイメージを、それぞれ「線」と「面」で自由に表現するといったエクササイズを行った。その際、抽象という概念をより理解できるように、既存のマークや具体的な形にならないよう留意した。

(3) 作品のテーマを考える ―自分の心の中を探る活動―

自分自身を作品に自由に投影できるように、「自分の心の中の言葉」を作品のテーマとして抽象的な形に表現することとした。自分の心の中の言葉を探る手段として、ブレインストーミングを行った。「こころ」を出発点として自由に言葉をつなげていくことによって、自分の心の中の言葉を探りやすくするようにしたが、「すなお」「遊び」「大切」など、それぞれの生徒が心の中の言葉を見つけ、作品のテーマを決定することができた。

(4) 作品のアイデアスケッチをする

決定したテーマ(こころ)をもとにアイデアスケッチを行う際、テーマとなる言葉を「線」と「面」で表し、そこから形のイメージを引き出す活動を行った。事前に「抽象的な形についてのエクササイズ」を行っていたこともあり、生徒達はスムーズに活動に取り組むことができた。例えば、「強さ」というテーマから、「ゴツゴツした形とやわらかい形の融合(ゴツゴツは自分に対しての厳しい部分を表現し、やわらかい形は人に対しての優しさを表している)」というイメージを引き出している様子などが見られた。

(5) 石膏による彫刻用素材作り

本題材では、彫刻用の素材作りから生徒達自身の手で行った。石膏を流し込む型として使用したのは1.5ℓのペットボトルである。彫刻用素材の制作手順は、以下の通りである。

○ 用意する物

- | | | |
|-------------|---------------|-----------|
| ・1.5ℓペットボトル | ・500ml ペットボトル | ・石膏 1 k g |
| ・プラスチックスプーン | ・新聞紙 | ・小刀 |

① 型作り

1.5リットルペットボトルの口の部分を小刀で切り落とす。下には新聞紙を敷き、怪我には充分留意する。



② 型に適量の水を入れる。

口を切り落とした 1.5リットルペットボトルに、水を 700ml 入れる。あらかじめ 500ml ペットボトルの 200ml の部分に油性ペンで印を付けておき、500ml ペットボトルに満杯入れた水プラス 200ml 部分の印まで入れた水を 1.5リットルペットボトルに入れば、簡単に 700ml の水を図ることができる。



③ 石膏の流し込み

水を入れた型に、石膏を静かに流し込む。流し込んだ後はペットボトルの横を叩いて気泡を逃がす。その後、石膏にムラが出ないようにプラスチックスプーンで静かにかき混ぜる。



④ 彫刻用石膏素材の取り出し

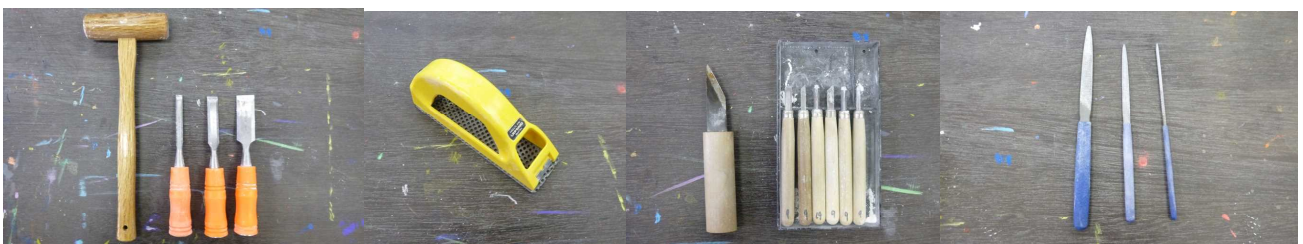
10分ほどで硬化するので、硬化後、ペットボトルを小刀で切り出し、彫刻用素材を取り出す。硬化直後は熱をもっているが、3時間ほどで冷える。水分を多く含んでおり、完全に乾燥させるためには3週間ほど要する。彫刻に適した状態になるためには、2週間ほどの乾燥が必要である。



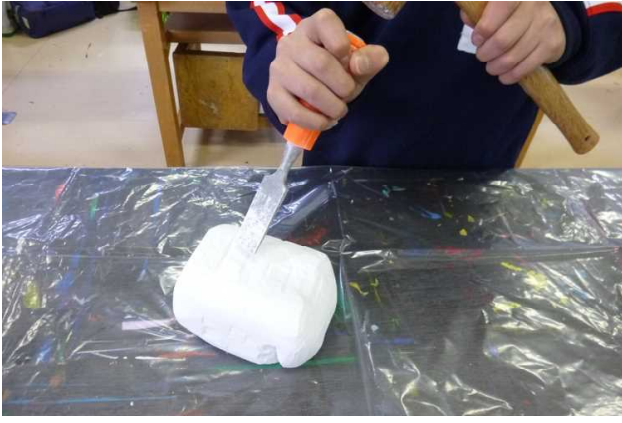
(6) 石膏素材の彫刻

石膏素材に鉛筆で形を書き込みながら、形の削り出しを行った。使用した用具は、以下の通りである。

- のこぎり
- のみ(大, 中, 小)
- 木槌
- アラカン(木工用)
- 小刀
- 彫刻刀
- 鬼目やすり(大, 中, 小)



それぞれの用具の特性や使用法などを指導し、用具を適切に選択したり使用したりしながら自分のイメージ通りの形の削り出しが行えるようにした。



(7) 石膏素材の研磨

作品の表面仕上げとして、以下のやすりを使用した。

- ・紙やすり(100番, 240番)
- ・耐水ペーパー(600番, 1500番)

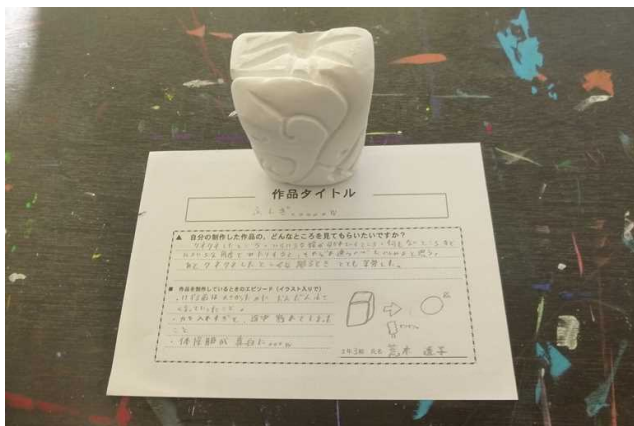
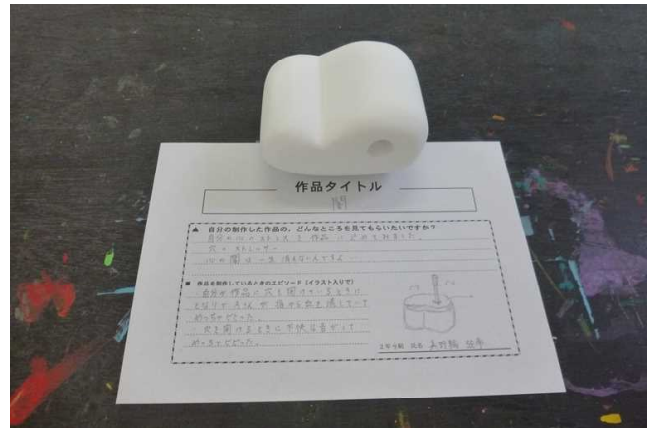
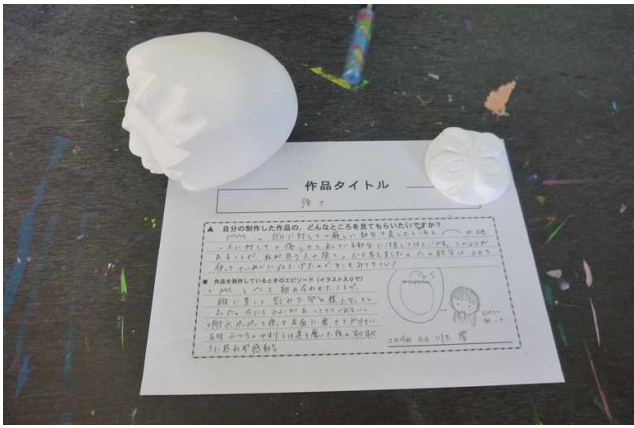
紙やすりや耐水ペーパーは、あらかじめ5cm×5cmに切ったものを用意し、番号が小さいやすりから使用して、作品の表面の状態に合わせて順に番号が大きいものを使用していくよう指導した。

石膏は、どんなに気泡を抜いて硬化させたとしても表面に細かい穴ができてしまう。そのため、耐水ペーパーを使用して水に浸けながら磨くとそれらの穴が目立ってしまうので、本題材では、表面の研磨は水を使用しない状態で行った。



(8) 作品鑑賞会の実施

自分の作品を説明する「作品カード」をつくり、それを作品キャプションとして掲示した後、お互いの作品を自由に見て回り、「鑑賞シート」に記入するという鑑賞会を行った。鑑賞シートは、質問の項目に答えていくことによって、作品に込められた意味や、抽象彫刻の形について考えられるようにした。また、自分が印象に残った作品として選んだ作者からサインをもらうことにより、作品を介してお互いにコミュニケーションがとれるようにした。



III 研究の成果と課題

○ 研究の成果

- ・授業の導入時に、茨城県近代美術館の所蔵作品を参考に、クイズ形式のワークシートを使用しながら鑑賞授業を行ったことにより、「抽象」と「具象」の概念をより深く理解することができた。
- ・彫刻する石膏素材を、一から自らの手で作り上げたため、作品に愛着をもち、完成まで意欲的に制作している様子が見られた。
- ・自分の作品の主題設定をする際、ブレインストーミングを行ったことにより、発想がより広がり、自分の心の中の言葉を引き出すことに繋がった。
- ・様々な道具を用意し、それらの基本的な使用法を教授したことにより、生徒一人一人が自分の意図した形に表現するために適切な道具を選択しながら制作を進める様子が見られた。

○ 研究の課題

- ・作品の主題を「個人」ではなく、「グループ」で設定するなど、発想を広げる段階で他者の意見や考えを取り入れられるような話し合いの場面をつくることも考えられる。